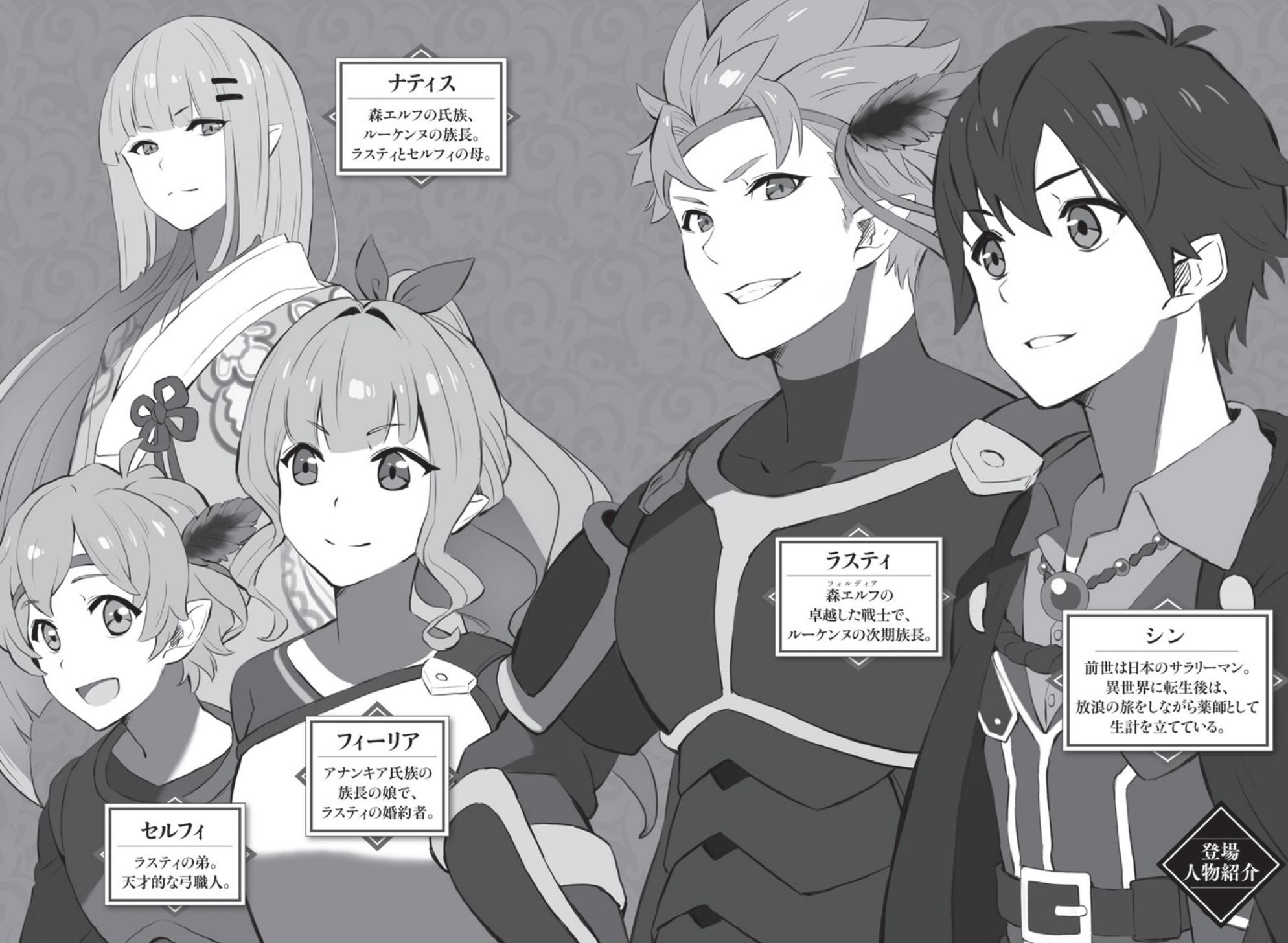


転生薬師は
異世界を巡る

*Tensei
kusushi ha
isekai wo
meguru*

山川イブキ
Ibuki Yamakawa

4



ナティス

森エルフの氏族、
ルーケンスの族長。
ラスティとセルフィの母。

ラスティ

フォルディア
森エルフの
卓越した戦士で、
ルーケンスの次期族長。

シン

前世は日本のサラリーマン。
異世界に転生後は、
放浪の旅をしながら薬師として
生計を立てている。

フィーリア

アナンキア氏族の
族長の娘で、
ラスティの婚約者。

セルフィ

ラスティの弟。
天才的な弓職人。

登場
人物紹介

目次

プロローグ 7

第一章 聖樹の森の戦士たち 24

第二章 災厄の足音 110

第三章 暴食の王 183

エピローグ 275

プロローグ

グラウ＝ベリア大森林、それは南大陸サウスの中央部から南西にかけて広がる最大の森林地帯だ。南北に最大で一四〇〇キロ、東西に二六〇〇キロの広さを誇り、サザント大陸のじつに二〇パーセント弱の面積を占める。

亜熱帯と熱帯地域をまたぐように広がるこの森は、貴重な植物素材の宝庫であり、そして同時に凶悪な魔物たちの棲処すみかでもある。

森の奥へと探索の手を伸ばすためには、高ランク冒険者のパーティが数個単位で臨まねばならない——そんな危険な場所に、その男はいた。

比較的上質な麻布で作られた平服の上に、たくさんのポケットがついた、見る人が見れば『ハンティングベスト』と言いそうな上着を身につけ、フード付きのマントを羽織はっている。

胸元にある『ショットシェルポケット』に筒状の各種薬瓶を弾薬よろしく差し込み、自分の身長よりも長い棒を杖のように扱う男は、その場に悠然と立っていた。

「シャアアッ!!」

そんな彼に向かって、大口を開けた大蛇だいじょう——フォレストバイパーが襲いかかる。森の悪魔とも称

されるBランクモンスターは、不快感と恐怖心を煽る音を奏でながら、自らの長大な胴体を伸ばしてマント姿の男——シン目かけて頭を突き出した。

頭から食われる！ そう思われた瞬間——
「はい、残念」

緊迫した場面にそぐわない、軽やかな口ぶりでシンが呟く。すると、フォレストバイパーの頭は彼の眼前で急停止する。その姿はまるでピンと張った豎琴の弦のようで、弾けば音が出るかもしれない。

襲撃に失敗したフォレストバイパーは、その後も二度三度とシンに向かって頭を突き出す、やはり彼の目の前で急停止してしまい、彼の体を口に収めることは叶わなかった。

「つたく、腹に重しを入れた暴れ鹿を食わせてやったのに、まだ足りないってか？ やれやれ、繁殖期のメスに遭遇するってのは、悪夢以外の何ものでもないな」

シンの言葉が示す通り、フォレストバイパーの腹は不自然に膨らんでいる。そして言葉通りだというのなら、それは彼の仕掛けた罠なのだろう。腹を支点に動きを制限された魔物は、なおも食欲に支配され、目の前の獲物に向かって無謀な突撃を繰り返す。

シンは慌てることなく、腰の異空間バッグから二〇センチほどの壺を取り出すと、それを目の前で大きく広げられた大蛇の口に投げ込んだ！

蛇の口が閉じて壺が喉を通るとき、くぐもったパリンという音と同時に喉の膨らみが消える。すると間を置かず、フォレストバイパーの体はビクンと一度、大きく跳ねた。

シンの放った壺の中には冷却剤が詰まっており、体内にぶちまけられたそれは、周囲の水分と反応し、フォレストバイパーを内側から瞬間的に冷却する。体から熱を奪われた魔物は、派手な音を立てて地面に崩れ落ち、そのまま動かなくなった。

「さて、頭を切り落とせばおしまいなんだが……さつきより腹の膨らみが小さいな」

頭が冬眠したままでも元気に活動するフォレストバイパーの胃袋に、シンは手に持ったナイフを腰の異空間バッグに仕舞い込む。

もし仮に目の前の獲物をすぐに仕留めた場合、解体時に消化途中の暴れ鹿を見る羽目になるだろう。シンはそう判断すると、後ろの大木にもたれかかり、空を見上げた。

「せめて、メシくらいは美味いもん食べねえとなあ……」

——グラウIIベリア大森林へ入るため、ファンダルマ山脈を越えたシンが道なき道を踏破する間に、異世界はひっそりと新年を迎えていた。

二つの世界——シンをはじめ人間たちが住む世界と魔族が住む世界が衝突し、やがて両者の間で大規模な戦争が起きた。しかしその戦争も、繋がった世界を遮るように大結界が張られて終焉を迎え、今年で九八七年。一三年後に大結界の消失を控えた世界は、いまだ予兆すら感じさせず、それゆえ人々の顔に、不安の色は見られない。

シンにとつて一人寂しい年末年始ではあったが、バラガの街で新年を迎えたとしても、あれだけ色々あった後では、盛大に祝い事をする必要もないだろう。

などと、無理矢理納得していた彼に向かって――

『バラガの街も昨年は色々ありましたからね。「せめて来年は！」ということで、今年は例年以上に盛大に祝いましたよ♪』

以前立ち寄った街で仲良くなった、普段は『森エルフ』の姿に扮し、冒険者ギルドでギルドマスターをしている魔竜の言葉が、シンの心を深く抉る。さらには――

『シン、減らした分の人口については、増やす努力もしてくださいね』

『ああシン、残念なお知らせだけど「巨乳の森エルフ」なんかその森にはいないから。期待しても無駄だから』

胸元の神器から聞こえてくる女神と暇神の声が、シンの心に止めを刺した……

そんなこともあって、現在地味に傷心中のシンは、五〇年に一度と言われるフォレストバイパーの大繁殖期に立ち会うことだけを目標に、グラウーベリア大森林を探索中というわけだ。

フォレストバイパーの胃袋が中身を消化し終えるのを、大木にもたれかかりのんびり待っていたシンだったが――

「……………」

「……ん？」

不意の音に耳を叩かれ、シンは首を巡らせる。

硬い金属音だった。魔物が跋扈する森の中、取り立てて不思議というほどでもない。なにせ、目

の前で動けなくなっているフォレストバイパーも、その体は鉄よりも硬い鱗で覆われているのだから。

「……………」

そんな日常の風景に、しかしシンは眉を蹙めると、音のした方向をジッと見つめる。

「鳴った音が一度だけ、てのがなあ……仕方ない」

シュツ――!!

半日は眠ったままのフォレストバイパーをその場に捨て置き、シンは森の中を駆け出した。



「フフウウ……」

「くっ……まさか私がオークごとときに」

――油断した。

否、油断と表現することすらおこがましい。フォレストバイパーを捜すことにこだわるあまり、背後に迫る危険に気付かないなど、戦士としてあるまじき失態!

不意打ちで右肩を砕かれ、とっさに左へ持ち替えた剣はヤツの棍棒で折られた。片手では弓を扱えるはずもなく、肩の鈍痛は魔法を行使するための集中力を奪っていく。なにより、目の前の『女』が逃走することを、オークが許すはずもない。

これは詰んだか——いや、アナンキアの戦士が軽々しく諦めてなるものか！ 私の命も、純潔も、こんなブタ野郎などには絶対くれてやらん！！

「……ブ、ブフ？」

そんな私に臆したのか、こちらに向かってにじり寄ってきたオークが急に立ち止まると、困惑したように身じろぎする。

——チャンスだ！

私は今のうちに呼吸を整える。これで魔法が使える程度に肩の痛みを抑えられれば、相手はただかオーク一体、切り抜けることはそう難しくない。

「すう……ふうふうう——む？」

トクン——

気取られぬよう静かに深呼吸をした私は、そこで自身の異変に気付く。

顔が熱い……いや、それだけではない。気がつけば呼吸は荒くなっており、心臓が早鐘を打っている。剣を握る手にも力は入らず、足元がおぼつかない。

「これ、は……？」

感覚が麻痺してきたのか、次第に右肩の痛みは消え失せ、オークに向かって構えていた左手が下がる。やがて、半ばから剣身を失っている剣は、カランと音を立てて地面に落ちた。

えっと、私は今、何をしているんだっけ……

「ブッフウウウウ！」

「きゃああつ!?」

眼前のオークは、持っていた棍棒をポトリと落とすと、歓喜に震える咆哮を上げながら私を押し倒す。

コラ、強引すぎるぞ！ こっちにも心の準備というものが……せめて手順くらい踏まないか、馬鹿者！

そんな思いも込めて、キツと睨みつけてやったのだが——

「ブヒヒヒヒ!!」

残念ながら彼は、微妙な女心というものを理解してくれない。まったく……

……ん？

「さつきから私は何を——」

私は——そう、確か私は今まで、彼と戦闘を……チョット待て。オークに向かって彼だと!?

……そう、彼だ……彼は私を押し倒すと、情熱的な眼差しをこちらに向け……じゃなくて!!

……ダメだ。考えがまとまらない。というよりも、少しでも気を緩めたら、目の前の彼がとても魅力的な存在に思えて……だからしっかりしろ、私!!

「やめろ……来るな……」

必死に正気を保ちながら、その場を離れようと後ずさりした私だったが、足首を掴まれ引き戻されてしまう。そして、興奮が頂点に達してしまったオークは、その昂りのまま私の胸元に腕を伸ばし、革をなめして作られた鎧の胸当てを、内側の服ごと力づくでむしり取った！

「ブヒイイイ!!」

「キヤアア!! ひあつ!? や、やめ——!」

あらわになった私の胸を、オークはその太い舌でベロンと舐める。この期に及んで、恐怖や嫌悪感よりも羞恥心が先に立つのが腹立たしい。本当に、私はどうなってしまったのか。

しかしてオークの方はといえば、貧相とはいえ私の裸体によほど興奮したのか、まるで遠吠える狼のように、その体をのけぞらせて天を仰ぎ見る。

……いや、違う。なんだか様子がおかしい。

「ブフンツッ! ブ、ブギ……ブ……」

「——?」

動かずに何やら呟くように鼻を鳴らしている際につき、私は這い出るようにオークの下から抜け出す。だが、それでもオークは何も反応を見せなかった。

やがて——

オークはそのまま後ろに倒れ込み、大きなイビキを立て眠りはじめた。

「は——え? どういう……んっ!」

グワンと目の前の光景が歪んだかと思うと、私の体もその場に倒れ込み、猛烈な睡魔に襲われる。一体何が?

次から次へと予測不能な事態に見舞われる中、意識が完全に失われる前に私が聞いたのは、ドサリと何かが地面に落ちてきた音と——

「はああ、これが『森エルフ』かあ……」

何やら不満を訴えるかのような、盛大なため息だった——

「……ん、ううん……」

……パチ……パチン!

乾燥した枯れ枝が、火にあぶられて爆ぜる音が耳に届く——

ゆつくりと目を開ける。

どうやら既に夜になつていらしい。木々の間から陽の光は届かず、代わりに焚き火の明かりが私の目に映る。はて、この状態は一体……? 確か、フォレストバイパーを捜しに森に入つて——

「ああ、起きましたか?」

「——!」

バツ!!

半開きだった目を大きく見開いた私は、焚き火の揺らめく炎の向こう側に人影を見つけると、すぐに体を起こして、人影とは逆の方向に飛び退く。そして——

「あ、そっちは——」

ズボオツ!!

……盛大に落とし穴に落ちた。

「痛う……」

「やれやれ、落とし穴の中にそれ以上の罠を仕掛けておかなくてよかったですよ」

落とし穴から私を引き上げつつ、ヒト種の男が暢気な声で話しかけてくる。一応このあたりは森の中でも特に危険地帯のはずなのだが……男からは緊張感というものが感じられない。

「なんでこんな近いところに落とし穴なんかを……？」

「別に大した理由ではありませんよ。魔物避けは一応していますけど、それでも来るとすれば、木々が密集しているそっちかなあ、と。後は、ついでにコイツを埋めるためです。そういえば自己紹介がまだでしたね。私はシンと申します」

シンと名乗った男は、丁寧な口調で話しながら、自分の後ろを指差した。そこには、解体途中の魔物の肉が吊るされている。うん、まあ起き抜けに見るものではないな……

——ん？ アレは……

「……と、すまない。助けられたこちらから名乗るべきだったな。私はフィーリア、アナンキア氏族の戦士が一人にして、族長ナハトの娘である」

「げっ……んんっ、エフン！ これはとんだご無礼を」

「いや、お気になさるな。族長と言っても、氏族のまとめ役というだけのこと、貴殿ら只人の領主や王家とは似て非なるものだ」

頭を垂れようとすると、彼を手で制すと、そのまま謝意を示すように自分の胸に手を当て……そこで

自分の状態に気が付いた。

革鎧をオークに剥ぎ取られ、露わになった胸元には、薄手の布が巻かれていた。

顔を上げると、シンは死んだ魚のような目をしたまま横を向く。ふむ、確かに気まずくはあるが、言うなれば緊急事態だったわけだから、私も責めるつもりはないぞ？

「シン殿——」

気にすることはないと言おうとする私の声を遮るように、彼が盛大なため息をつく。なぜだろう、そこはかとなく不愉快な気持ちになった。

「……どうか、したのか？」

「いえ、大したことではありませんよ。ただ、普段はくだらない嘘ばかりつく知人が、今回は珍しくも本当のことを語っていたのが口惜しいというか、なんとというか……はあ」

……ヒト種はよく分からないな。

「——おかわりだ!!」

「……構いませんが、これで四杯目ですよ？ 一体、その細い体のどこに収まっているのです？」

うるさいな、別にいいではないか。アナンキアの戦士にとつてこのくらいは普通だぞ？ 狩りともなれば、時には飲まず食わずで長期の活動を強いられることもあるんだ。『食い溜め』は、戦士にとつて必要な技能と言ってもいい。

さつきも、私の話し方がどうのと言っていた。まったく、些細なことを気にする男だ。



「それにしても、この『どんこつラーメン』と言ったか、実に美味い。オークの骨だけを煮出すとこのようなスープができるとは、ヒト種の料理人は天才だな!!」

「ははは、気に入っていたただけでしょうで幸いです。ただ、手持ちがないため平麺にしましたが、欲を言えば細麺で作れたかったですねえ。その方がスープが麺によく絡んで美味しいんですよ」

「里に戻れば用意できる。ぜひ里の者に作り方を伝授してくれ」

「……別に否やありませんが、『森エルフ』がそんなに簡単によそ者を招き入れてもいいんですか?」

「本当に些細なことを気にする男だな。」

「いいに決まっているだろう。シンは私の命の恩人で、おまけにフォレストバイパーの毒袋を四体分も譲ってもらおうのだからな。賓客として招待するぞ……なんだ、その顔は?」

「いえ、Bランクの魔物であるフォレストバイパーを単身で狩りに来たファイリアさんが、なぜオークごときに後れを取ったのかと思ひまして。どこか体調でも悪いようでしたら言ってくださいね。私は薬師ですから、よく効く薬をご用意しますよ」

「た、体調は悪くなどない! 用を足して気が緩んでたところに不意打ちを食らっただけだ!!」

「戦場に赴く戦士が体調管理を怠るはずがないだろう! ……なんだ、その残念な生き物を見るような目は? いや、それよりも!」

「チョット待て、シン。キミが薬師? てつきり高ランク冒険者とばかり思っていたぞ」

「このナリを見て、どうしてその結論になりますかね……」

シンは羽織っているマントを指でつまむと、前を広げて私に見せつける。

マントの中に鎧や防具の類はなく、変わった形のベストに薬瓶が差し込まれていた。

確かに、前衛で戦うようには見えない。仮に魔道士だとしても、呪文の詠唱が必要な彼らが、一人で危険地帯をうろつくわけがない。とはいえ、落とし穴から引き上げられたときに握った手は、明らかに強者のそれだった。薬師だと言われても、到底納得などできない。

「あんな、私が言うのもおかしい話だが、ここはサザント大陸最大の森にして、周辺諸国から魔境と恐れられる、ゾマの森だぞ」

ゾマの森——森の外ではグラウ||ベリア大森林の名で呼ばれていることは、冒険者たちの間では踏破不能の自然迷宮として知られている。

危険な魔物は当然のことながら、なにより森の広さそのものが冒険者にとつては脅威と言っている。どんなに腕に覚えのある冒険者でも、単独パーティで潜るのは二の足を踏むほどだ。

それを、冒険者でもない薬師がたった一人で……一人だど!?

イヤイヤイヤイヤ。無理だ。絶対に無理だ！ アナンキア氏族をはじめとする私たちが、この森を単身でも自在に移動できるのは、聖樹の加護があつてのこと。それを持たないシンが、これほど森の奥に来られるはずがない。彼は一体何者なのだ？

「シン……キミは命の恩人だ。だから疑いたくはないし、危険視したくもない。正直に答えてくれ。キミは何者で、何が目的だ？」

「いえ、ですから薬師ですよ？ ホラホラ」

そうやってシンは、腰に提げた鞆から薬瓶を次々と取り出す。いや、いくら薬を大量に持ち歩いているからといって……って、多すぎはしないか？ 到底鞆に収まる量ではないぞ？

……あ。

まさか異空間バッグか！

「シン、そんなモノの存在を軽々に明かすなど」

「これぐらいの秘密がある人間だと知っていたほうがいいが、フィーリアさんも納得できるでしょう？ それから……ハイ、これです」

「大きな鱗だな……ドラゴンのものか？」

「その言葉を聞いたら、きつと怒るでしょうねえ。コイツは大地の魔竜の鱗ですよ。実は最近友達になりました」

「なっつっ!!」

魔竜の鱗……いや、それよりも、魔竜と友達だと？ そんな荒唐無稽な話が!?

シンがどうぞと差し出す一枚の大きな鱗を受け取ると、私はそれを丹念に調べた。

鑑定スキルを持たず、素材の識別や良し悪しなど分からない私だが、それでもコレがとんでもないものだというのは分かる。本体から剥がれ落ち、ただの素材となった鱗一枚に、アナンキアの戦士が気圧される。確かにこんなもの、魔竜以外に考えられない。

「こんなもの、一体どうやって……」

「まあ、友情の証？ ということで。代わりに、なかなかの金銀財宝や希少な素材を強請られました

たよ」

そういう問題ではないだろう。そもそも売ってもらえるようなものではないぞ？

ハハハと笑うシンに目眩を覚えたが、魔竜と友達だというならまあ納得も行く。おそらく、魔竜の背に乗せてもらい、森の奥まで入ってきたのだろう。かの魔竜は、相手が明らかな敵対行為を取らない限り、いたって温厚だと聞いたことがある。

とはいえ、なんとも非常識な話だ。

「まあ、事情は理解した。したくはないが納得もしよう。それで、目的は？」

「実は、フォレストバイパーが繁殖期に入ると聞きましたので、見物でもしようかと思ひまして。なんでも、今年は五〇年に一度の大繁殖期というじゃありませんか。そんな大イベント、見ないわけにはいきませんよ♪」

……彼は、非常識を通り越してバカなのだろうか？

「はあ、深くは考えない方がいいのだろうな……フォレストバイパーといえば、シン、今さら聞くのもなんだが、あの高ランクの魔物をどうやって倒したのだ？ まさか、その棒で倒したなどと言うなよ？」

綺麗な状態でフォレストバイパーの毒袋を手に入れるには、頭部への攻撃は御法度だ。だからといって、あの硬い胴体に対して棒による打撃は相性が悪すぎる。

「ああ、それなら簡単ですよ。まずは低ランクの魔物を生け捕りにしてですね。そいつの腹に重しを詰め込んで放します。しばらくしてエサに本命が食らいついたら——」

本当に非常識なヤツだな、コイツは！ どうやったらそんな悪辣な手段を考えつくんだ？ いい加減、命の恩人に対する敬意が薄れてきたぞ。

「いやあ、それにしても——」

……まだ続きがあるのか？

「——オークからフィーリアさんを救出するときは大変でしたよ。在庫切れのせいで、いつもより数段強力な媚薬を使ったり、そのせいで興奮しすぎたオークの行動を抑えるため、今度は意識を混濁させる薬を撒いたり。いやはや、苦勞させられました」

——なんだと？

第一章 聖樹の森の戦士たち

早朝の、木々の間から日が差し込みはじめた頃、森の大樹はユサユサと枝を揺らし、葉っぱが数枚ハラハラと落ちていく。

もし、その場に誰かいたのなら、二つの人影が枝から枝へと飛び移っているのが見えただろう。「一晩経ったのに、まだ頭が痛いのですが……」

「自業自得だ。私をオークにときめかせた罪は重いからな」

後ろから聞こえるシンの怒み節を、先導するフィーリアは振り返ることもせず切っ捨て捨てる。

魔物の遭遇を避けるためか、樹上をヒョイヒョイ移動する二人はやがて、周囲の木々とは明らかにサイズの違う、幹の太さが五メートル近くもある、スギ科の大木の前に到着した。

「ここが？」

「ああ、精霊回廊の入り口だ」

精霊回廊——世界樹や聖樹によって護られている森に点在する空間の歪み。

転移魔法のように、一瞬で別の場所に移動が可能だが、移動できる場所は限られており、また、

回廊を開くことができるのは、祝福を受けた森エルフのみ。

「回廊を開く前に改めて確認するが、シンの目的はフォレストバイパーの繁殖に立ち会う、ということではないのだな？」

「ええ、それ以上何かを要求などしませんよ。繁殖場所も自分で探しますので」

「その必要はないぞ。場所なら私たちが知っているから、案内くらいしよう」

「本当ですか!? いやあ、今年は幸先のいい滑り出しですねえ」

そう言っって喜ぶシンは、精霊回廊の入り口と説明された大木を、ペタペタと触りながら周囲をグルグルと回り、時折り真面目な表情でブツブツと呟いている。

「それにしても、大繁殖期なら私も一度体験しているが、そんなに楽しみなものだろうか」

「フィーリアさん、ヒト種がそれに立ち会えるのは一生に一度あるかないかですよ？ しかもその際には、上位種が生まれるっていうじゃありませんか」

「上位種？ なんの話だ？」

上位種、その言葉にフィーリアは首を傾げた。それを見たシンもまた首を傾げると、異空間バグからあるモノを取り出す。

「なんのと言われましても、この鎧って、そいつの素材が使われているんじゃないんですか？」

それは、修復不可能にまでズタズタにされたフィーリアの鎧だ。

叩けば金属鎧のようにカンカンと音を響かせ、衝撃を弾き返すその胸当てはしかし、徐々に力を

込めると固いゴムのごとくグニヤリと形を変えて、手を放せば元の形に戻る。

そんな不思議な特性を持つコレは、素材に『グランディヌスの皮』なるものが使われている。己の持つ異能【組成解析】によってそれを知ったシンは、グランディヌスと呼ばれるモノこそ、フォレストバイパーの上位種だろうと見当をつけていた。

「確かにアレは、希少種と言つても問題はないと思うが……いや、どうなのだろうな」
しかし、フィーリアの態度は些か微妙だ。

「ん？ よく分かりませんが、実物を見ればはつきりしますよ」

「それもそうだな。まあ、そのためにもフォレストバイパーの毒袋が必要だったのだが、シンのおかげで四体分を手に入れることができた。全部で五体分必要なのだが、残りは別の者がなんとかしてくれるだろう。そういった意味でもシンは歓迎されるだろうから、里の滞在と待遇は心配しないであれ」

「それはありがたい。このところ、トラブル続きで気の休まる暇もありませんでしたからね。お言葉に甘えて、里ではのんびり過ごさせていただきますよ」

「ははは。シン、誰が言い出したのかは知らないが、そういうのを『フラグ』と言うらしいぞ……どうした、変な顔をして？ いいから私の手を握れ、精霊回廊を通るぞ」

差し出した手をシンが握るのを確認したフィーリアは、もう片方の手を大木に翳し、何事かを呟く。すると二人の目の前に、緑色の空間の歪みが浮かび上がった。

声も出ず、ただ目を見開くシン。フィーリアはそれを面白そうに眺めた後、シンを引っ張るよう

に精霊回廊の中へ飛び込んだ。

!!

視界が光で埋め尽くされると、自身の使う転移魔法とは異なる感覚と、重力から解放されたかのような浮遊感に、シンは一瞬意識が飛びかける。

そんな違和感に耐えること数秒、光が消えた二人の前には、先程とはまったく別の風景が広がっていた。

目の前には、一本の太さが一メートルを越える丸太、それがズラリと隙間なく打ち込まれた柵が延々と続く。柵の高さはゆうに三〇メートルはあるだろう。

そしてその光景以上にシンが驚いたのは、周囲を漂う濃密な植物の香りだ。香り自体に不快さはないものの、いつまでも嗅いでいると嗅覚が破壊されそうなほどである。

この強い芳香こそが、魔物を寄せつけない結界の役目をしていると、後にシンは聞いて知った。

「んがっ！」

「どうだ、シン。ここが我らの住む『アナンキア』だ。なかなかのもの——どうした？」

振り向いたフィーリアは、いるべきはずの場所にシンがいないことに気付くと、あたりを見回し、やがて、足元で潰れた蛙のような無様を晒す物体を目にする。

「何かの遊びか？」

「……そんなわけないでしょう。初めての体験で平衡感覚が狂っただけですよ」

「かろうじてキミに常識が通用することが分かって安心したよ。さて、よっこい、せっ！」

フィーリアは、フードを被った状態のシンの首根っこを掴むと、一気に吊り上げた。「うおうっ!!」

「はははっ! そういえば、昔はちよこまかと逃げ回る弟をこんな風に捕まえたものだ」「さいですか。弟さんには同情しますよ……」

ジト目で返すシンを見て、フィーリアは再度高笑いする。結果として、それがよくなかった。フィーリアが住まうというアナンキア。柵で囲われているのは当然、外敵の侵入を防ぐため、ならばそこには門兵のような見張りがあるのもまた当然である。

微かな笑い声を耳に捉えたその男は、視界の先、精霊回廊の出入り口となっている大木の前に二つの人影を確認すると、胸に下げた小さな笛を思い切り吹いた。

笛がパイイと甲高い音を響かせると、それがやむ頃にはすでに、柵の上には十人近くの森エルフが弓を構え、二人の門兵が槍を携えてフィーリアたちの前に接近していた。

「姫様、よくぞご無事で!! 連絡もなしに出て行かれた挙句、一向に戻る気配もなし、今まさに捜索隊を出そうと準備をしていたところですよ!」

「姫様はよせ。多少のトラブルはあったものの、こうして無事に戻ってきた」

そう言うとフィーリアは、力強く胸元をドンと叩く。ただ、その肝心の胸元には、戦士の鎧ではなく布切れがサラシのように巻かれている。どこから見ても多少のトラブルで済むものではない。加えて目の前のシンである。

「トラブル……ですと?」

「ああ、実は森の中でこの男に——」

ジャキ!!

フィーリアを姫様と呼んだ二人は槍を構えると、その穂先をシンに向けて固定する。それと同時に、柵の上の弓兵からは殺気が漏れ出し、開いた門からは武器を構えた戦士たちが殺到した。

「……『フラグ』がなんでしたっけ?」

「あ、いや……」

予想外の展開に、フィーリアはあわわと口をパクパクさせるだけで言葉にならない。

それをどのように捉えたのか。槍を構えた男は、諦観の表情を浮かべるシンに向かって、感情を押し殺した声で話しかける。

「——下郎、末期の言葉くらいは聞いてやろう」

「……弁明の機会がいただけるのでしたら、ぜひその席で」

「お前たちチャメロ! シンは——」

制止の声は間に合わず、槍の石突がシンの鳩尾に深々と突き刺さった。

「ぐっ——んっ!!」

くの字に折れ曲がる動きで、シンの体を掴んでいたフィーリアの手が離れる。すると今度はその首目がけて、槍の太刀打——金属で覆われた柄の部分——が振り下ろされ、シンの意識は刈り取られた。

シンの意識が途切れる直前に聞いた声は、フィーリアの絶叫だった。

「この度はお詫びのしようもない!!」

二〇人ほどの森エルフから頭を下げられたシンは、ズキズキと痛む後頭部をさすりながら、困惑の表情を浮かべていた。

各辺一〇メートルほどの板張りの部屋。そこでシンは一人だけ、草で編まれた畳のようなものの上に座らされている。おそらく上座ということなのだろう。

そんな彼の前には、一際強いオーラをかもし出している男を筆頭に、全員が胡坐をかいて床に両手をつき、頭を擦りつけている。その姿はさながら武士の出陣式か、はたまた謝罪の体勢か。

気分は武家屋敷である。

(どうしてこの氏族は、誰も彼もが武人スタイルの生き様なのか……)

眉をハの字にしたシンが懊惱していると、彼以外でただ一人、頭を下げていないフィーリアが口を開いた。

「シン殿、勘違いとはいえ貴殿に無礼を働いたのは事実であり、怒りが収まらぬのはごもつとも。

しかしながら、ここはなにとぞ矛を収めてはもらえないだろうか?」

「え? ああ、少し考え事をしてただけで、怒ってなどいませんよ。大切な同胞、ましてや貴人に何かあったやもしれぬとあれば、先程の行動も理解できます。幸い大事には至ってはおりません

ので、大事にするつもりは毛頭ありませんよ」

にこやかに、そして穏やかに話すシンに、男たちはさらに頭を床につける。

事態が終息すると思われた直後、先頭で頭を下げ、先程シンに対して謝罪の言葉を述べた男性が、再度口を開く。

「もったいなきお言葉。なれど、娘の恩人に狼藉を働きながらお咎めなし、それでは我らの気が済みませぬ。許されるならこのナハト、我が右腕をこの場にて切り落とし、以て贖罪とさせていただきますたく——」

「父上!」

どうやら先頭で頭を下げていた男は、フィーリアの父親で族長らしい。言葉遣いもそうなら、行動も実に武人的だ。

「許されませんから!! そんな謝罪の仕方は要りませんから!」

スタイリッシュな謝罪からのエキセントリックな贖罪のコンビに、シンの方が悲鳴を上げる。

(もうヤメテ! なに、この森のエルフってなんなの!? 中身完全に戦国武将じゃん! しかも一際ヤバイ地方の!!)

とはいえ、相手もハイそうですかと納得するはずはない。

「しかしそれでは我らの気が!」

「そんなことされても嬉しくありません! どうしても気が済まない、そう仰るのでしたら二つ、私の要望を叶えていただきたく存じます」

「要望を二つ？」

なおも抗弁する族長の意識が別のものに移ったところで、シンは一気に捲まく立たてる。

「ええ。まず一つ目。私は世界を旅して回る薬師です。そのため、各地で薬の材料や貴重な素材を購入し、作った薬をまた売って——そうして生計を立てております。ですの、もしよろしければ、この森で採とれる植物や様々な素材、それらを買わせていただければと思います」

「そのようなこと。買うなどと言わず、好きなだけ持っていていただいて構かまいませんぞ」

「いえ、それは私の方が心苦しいので勘かん弁べん願がんいます。もしどうしてもというのであれば、市価の半値で譲ゆっていただければありがたい。そして二つ目のお願がんいですが、フォレストバイパーの産卵時期が過ぎるまで、ここに滞在する許可をいただきたいのですが……」

「……は？」

「父上、彼——シンは元々、それが目的でこんなところまでやって来た変わり者として」

呆ぼうける父親に、フィーリアが事情を説明する。

はじめは神妙に聞いていた族長だったが、顔からは徐々に緊張感が失せ、しまいには若じやう呆あきれ顔になる。ちなみに後ろの連中は、頭を床につけたまま首を傾かげるといふ、器用な芸当を見せていた。「決して迷惑をかけるような真似まねはしませんので、どうぞお願いいたします」

「シン殿は変わった御仁ですな……無論、こちらに異論はございません。どうぞごゆるりと、この里に滞在してくださいませ」

それからシンは、後ろで頭を下げていた男たちからも、順繰りに謝罪の言葉をかけられる。そし

てその都度、エルフの若く秀麗な相貌そうぼうから繰り出される武士のような言葉遣いに、苦笑いを抑えるのに必死だった。

そして——

「……ふう」

あてがわれた部屋の中、ようやく安堵あんぞのため息をついたシンは、大の字に寝転ねぶ。

『シンにしては、えらく穩便えんべんに済ませたものですね？』

そこへ、シンの体内にある竜宝珠ドラゴンイオウを介して、大地の魔竜メタリオンの思念が、彼の頭の中に響いた。何の前触れもなしに話しかけてくるリオンに、しかしシンは欠片かけらも動うじず、冷静に返す。

「……リオン、とりあえずお前が俺のことをどう評価してるのか知りたいので、チョットここに来て座りなさい」

巨乳美女の姿で——とはあえて言わなかったものの、相手には充分伝わったようで、当然のように無視された。

お願いを聞いてくれない無慈悲な友人に、シンは心の中で悪態をつきながら話し出す。

「暴れるメリットが一つもないからな。まあおかげで相手は俺に対して、感謝と負い目で強気には出られない。大概の要求は無条件で通るし、多少無茶なことも押し通せる。万々歳だな」

『さすが外道ゲウドウですねえ……』

「酷くない？」

呆あきれる声に突っ込みを入れつつ、グラウ＝ベリア大森林の森フォレストエルフについて、シンはリオンから

あれこれ聞き出した。

——グラウーベリア大森林には、シンが出会ったアナンキア氏族をはじめ、ミラヨルド、ルーケンヌ、パラマシル、サンノイドと、合計五つの氏族が存在する。この呼び名は、彼らが護り、また護られている五本の聖樹の名前でもある。

森の中心には世界樹があるとされているが、通常的手段では近付くことも、それどころか姿を見ることすら難しい。

そんな世界樹から、北の位置にあるアナンキアを筆頭に、前述の順番で右回りに五本の聖樹が点在し、各々の里には二万人ほどの森エルフが住んでいる。

一番東に位置するミラヨルド。彼らは五氏族の中で最も開放的であり、大森林の東にあるハルト王国と、活発に交流している。

パラマシルとサンノイド。こちらは、数十年前から険悪な仲とのこと。聖樹同士の距離が近く、そのせいで狩りや希少な植物など、縄張り問題で揉めていることが理由だ。

シンが滞在するアナンキア、そしてルーケンヌは特にこれといった特徴はなく、ごく一般的なエルフの営みが見られるだろう、とはリオンの言である——

「一般的とは……?」

リオンの言葉に、首を傾げる以外の反応ができないシンだった。

その後、森を抜ける間に採取した、様々な植物や魔物の素材。これらを整理、整頓しているとあつというまに時間は過ぎ、気がつけば日は傾いている。

（食事はどうしよう?）

シンがそんなことを考えていたところへ、実にタイミングよくフィーリアがやってきた。

食事の準備ができたと告げる彼女についていけば——なぜか宴会場に案内される。

「何か、祝い事でもあるのですか?」

「……本当に些細なことを気にする男だな。疑問など、酒が飲めるといっただけで全て呑み込め。それがいい男というものだ」

「はあ、そういうもんですか。フィーリアさんは男前ですね」

お互い、相手に呆れたような目線を送っていると、先程、実に男前な責任の取り方をしようとした男から声をかけられた。

「来られたか、シン殿! ささ、こちらへ」

宴会場全体に届くような声で自分の名を呼ばれ、場の注目を一身に浴びたシンは、促されるままに上座に座る。

空気の読めるジャパニーズサラリーマンの前世を有するシンに、断るといっ選択肢はなかった。

シンの両隣に族長のナハト、その娘のフィーリアが着座し、皆の視線が三人に集まる中、ナハトがおもむろに口を開く。

「此度は、大事な客人を迎えての祝いの席である。客人の名はシン、我が娘の恩人にして、行き違

いから生じた我らの無礼を水に流してくださった徳量寛大の徒である。また、この時期必要になるフォレストバイパーの毒袋を四体分も提供してくれた、まさに豊穰の使い。皆、今宵は大いに飲むがいい」

『おーおー!!』

族長の宣言ののち、次々に杯を酌み交わし、盛り上がる武闘派の森エルフたち。そんな中でシンはというと、挨拶に来る森エルフたちに営業スマイルで応対していた。

彼らの列が途切れた頃、タイミングを見計らっていたのだろうか。フィーリアの逆隣に座っている二〇歳（ヒト種換算で一〇歳）くらいの年若い少年が、シンに話しかけてくる。

「シン様、この度は本当にありがとうございます」

周囲とは一線を画す、大人しい雰囲気のエルフの少年は、そう言ってシンに頭を下げた。

「感謝なら充分にいただきましたよ。あー、ええと」

「カイトと申します、シン様」

「様付けはよしてください。カイト君は、フィーリアさんの息子さんで？」

ゴン——!!

「痛い……イキナリなにを？」

「バカモノ！ カイトは私の弟だ。私が子持ちに見えるのか!？」

顔を真っ赤にして怒るフィーリアを見て、周囲がどっと笑う。

シンは頭をさすりながら不満顔で——

「見えるも何も、エルフの外見から、どうやって年齢を見分けると言うんですか？」

「そ、それは！ ……雰囲気というか、佇まいというか、色々だ！」

「んな無茶な……ああなるほど。つまりフィーリアさんは、大人の女性らしい佇まいもなければ、妻にと望まれる雰囲気もかもし出していないということですね！」

ゴン——!!

「ぬおっ！」

「喧嘩を売っているのか？ いや、売っているのだな。いいだろう、泣きたくなるほど買い叩いてやる！」

二人のやり取りに、すでに酒が回りはじめた周囲はやいのやいのとはやし立てる。

あたふたするカイトの前で、やる気満々で二人が唸り声を上げていると——

ゴスンツ!!

フィーリアの脳天に、シンが食らったものとは明らかに違う、質の高いゲンコツが落とされた。

「つ~~~~~~~~!!」

「ハーツハツハ！ フィーリア、そなたの負けよな。というかそなた、恩人の頭をそうポンポンと叩くでない」

叩くどころか殴るのだが、その辺は気にしないらしい。というか、父親の基準からすれば、娘のそれは確かに叩く程度なのだろう。

頭を押さえ、涙目で何か言いたそうなフィーリアではあったが、さすがに自重したようで大人し

く座る。耳まで赤くした顔で、シンを睨むのをやめる気はなさそうだが……

「……で、フィーリアさんは一体何歳なんですか？」

「我が娘なら五〇は越えておりましたかな。まあ、腕っ節ばかり鍛えたがる、まだまだ子供にござるよ」

「族長、姫様は今年で九〇歳ですよ」

「む、そうであったか？ まあ、一〇〇にも届かぬのだ、大した違いはなかるう」

大ざっぱすぎる認識と、赤ら顔で又ハハと笑う姿。そこに里を統べる者の威厳はなく、ただの酒飲みオヤジがいるだけだった。

その後も宴会は続いていたが、不意にナハトがポツリと呟く。

「……娘も、せめてもう少し落ち着きが出てくれれば、安心して嫁ぎ先へ送り出してやれるのだがな」

「え、フィーリアさん、結婚するのですか？」

「うむ、ルーケンヌの次期族長のもとへな」

ルーケンヌとは、北にあるアナンキアに対し、グラウ＝ベリア大森林の南に位置する聖樹の里である。

離れた土地に嫁ぐ娘を思つてか、ナハトの表情はどこか寂しげであった。

なんとなく言葉をかけづらくなったシンは、ふとフィーリアを見ると――

「……………」

キユツと唇を引き結び、どこか思いつめたような表情を浮かべている。それを見たシンは、心の中だけで盛大なため息をついた……

――アナンキアの朝は遅い。

グラウ＝ベリア大森林の中にある集落では、陽の光がまともに差すのは早くとも七時過ぎる。にもかかわらず、森エルフの戦士たちは朝の四時から完全装備で柵の外を走り、木の枝に飛び移り、さらに当番の者は、朝の食材の調達に森へと入るのだ。

シンが目を覚ました六時には、いまだ薄暗い広場で模擬戦闘をしている戦士たちの姿があった。「武士かとも思ったが、中身は海兵隊だったか……」

昨夜あれだけ宴会で騒いだ次の日にこれである。アナンキアの戦士たちの質の高さが透けて見えるようだった。

ちなみに、現在シンがあてがわれている部屋は、彼らが訓練施設として使っている建物の一室で、族長のナハトや、その親族などが滞在時に使用する部屋である。

顔を洗って意識をハッキリさせたシンは、食堂で適当に朝食を掴んだ後、そのまま集落の中を散策しようと宿舎を後にした。

そこへ――

「あ、シン様！」

外へ出たとたんに声をかけられる。声の方を向くと、そこには森エルフの少年の姿が。昨日紹介してもらった、フィーリアの弟のカイトだ。

「おはようございます、カイト君。それから様はよしてくださいよ、恥ずかしいですから」

「そうですか？ ではシンさんで。それでシンさんはどこへ？」

「ええ、滞在許可を買ったものですから、街中でも散策しようかと」

「でしたら僕がアナンキアを案内しますよ！」

シンは道案内を手に入れた。

森エルフの多くは、自分たちの故郷を、村、街などとは呼称せず、聖樹の名前で呼ぶのが通例らしい。ただ、対外的には○○の街——もしくは里——で通しているとのこと。

訪れたときに見た、大きな柵で覆われた空間の広さは、直径が二キロの円形になっており、その中に約二万人が住む。

住居や各施設は、外観はログハウスなどの木造建築で、商店以外の建物内は原則土足禁止。どこぞの別荘地のようなのである。

全ての住人が森エルフというわけではなく、わずかではあるがヒト種やドワーフなども住んでいる。彼らの大半は、鍛冶師や職人、交易商人とのこと。

森エルフということもあり、種族特性として全員が風属性の魔法の使い手だ。また、軽い身のこ

なしに加え、弓の腕前はヒト種であれば熟練の弓兵並み。

その中でも『戦士』として訓練を受けている一〇〇〇人ほどの精鋭が、森の外で魔物を狩ったり、悪意を持った襲撃者への対処をしている。

里の中心には、幹の太さが三〇、高さが二〇〇メートルになる聖樹アナンキアがそびえ、街のどこからでも見るることができる。

シンは、カイト少年の案内で朝市にやってきた。

店頭には様々な果実や木の実、野菜などが並んでいるが、やはりというべきなのだろうか、肉や魚の類は多くなかった。

「森エルフの皆さんは、肉はあまり食べないのですか？」

「好みもありますが、どうしても肉が食べたい！ という人は少ないですね。『戦士団』の方々が『肉を食べないと力が出ない』と言って、狩った獲物の大半を自分たちで消費しているのが、市場で肉を見かけない一番の原因ですけど」

あははと笑うカイトに、妙に納得したシンも乾いた笑いを返す。

店を回りながら買い食いをしてしていると、シンはふと、周りの森エルフたちの会話に違和感を覚える。いや、それはカイトと話をしているときから感じていたものだが、ここに至ってはつきりと自覚してしまった。

彼らの喋り方が、カイトが言うところの『戦士団』とはまるで違う。シンにとって馴染みの、

開いた木の扉がキイと鳴ると、まるでそれが呼び鈴だったかのように、店の奥で人影が動く。「いらつしやいませ。これはカイト様、今日はどのような用向きで？」

「おはようございます。父から連絡は行っていると思うのですが」

「ああ、ではそちらの方が！ はじめまして、シン様。そしてようこそ、我がタラスト商会へ。私はタラストⅡアナンキア、商会の会長を務めております」

カイトの言葉を聞き、その顔に喜色を湛えたエルフの男性は、シンの前で優雅に頭を垂れる。

男に倣うようにシンも頭を下げ、お互い自己紹介をするのだが――

「ああ、五二〇歳……そうですね」

エルフの年齢を当てるのは。自分には不可能だ。そう改めて認識するシンだった。

「話はナハト様から伺っております。では、どうぞウチの品揃えをご堪能ください」

「それはもう、遠慮なく……おお、このエルダートレントの枝はいいですねえ」

シンは、壁にかけてあった、二メートルほどの太くて長い丸材を手取る。そしてそれを、軽く振り回して重心の位置を確認すると、今度は指で弾いて反響音を聞いたり、魔力を流して伝達量、速度などを、丹念に調べ上げた。

一通り素材の状態を確認し、満足げに目を細めるシンに向かって、タラストはこれまた満面の笑みを浮かべて話しかける。

「さすが、コレの良さが分かりますか。トレント系の魔物というのは、その樹齢もさることながら、下処理の作業精度によって、その後の効果や能力に大きな差が生じるものですからね。おや、よく

見ればシン様のその杖も、エルダートレントの枝が使われているご様子……処理の手際は及第点ですが、時間をかけなさすぎですね。下処理はあせらず日数を惜しまず、これは鉄則です」

「ハハハ……やはり専門家の目は誤魔化せませんねえ。耳の痛い話です」

どうやらどちらも素材マニアらしく、一瞬で意気投合した二人は、その後も案内役のカイトそっちのけで、店内の素材を手にとっちはいちいち丁寧に素材談義に花を咲かせる。

徐々に熱を帯びていく会話の内容に、カイトは引きつった笑みを浮かべながら、ゆっくりと後ずさり……二人に同時に肩をつかまれた。

「カイト君、戦士団に入れば、道具の手入れは必須ですよ。正しい手入れの仕方に、使われている素材の特性。戦闘技術だけ覚えれば良いというものではないですからね」

「シン様の言うとおりですよ。ささ、カイト様、私たちと一緒に、道具への愛情を育みましょう」

「ええ……」

逃げ道を失い、味方もいない。涙目になったカイト少年は、戦場で孤立することの危険性を学んだ。

「いたいな少年を、数寄者の沼に引きずり込もうとする悪魔だったが、店内をぐるりと見回し、疑問を口にする。

「この店、確かに品揃えは豊富なのですが、フォレストバイパーをはじめ、爬虫類系の魔物の素材が多いわりに、オーガなど、二本足の素材が見当たりませんか？」

「これは耳の痛い。実は、ゾマの森はオーガ種の数が極端に少なく、見つけるのが困難なのです。

それ故、素材の確保はかなり難しいですよ」

「なるほど……タラストさん。ここだけの話、オーガの素材でしたら、私の手持ちに——」

ギン——!!

シンが話し終わる前に、タラストは彼の正面に回り込む。そして、猛禽類のごとき鋭い眼差しをシンに浴びせると同時に、両肩をガツシと掴む。この間、わずか〇・一秒。

「……今の話、本当ですか？」

「ものによっては二分ほどありますよ。ただ、少しかさばるのでここではちよつと」

「それではこちらの保管庫まで……おお!!」

店のカウンターから奥へ進むと、売り場よりも広い空間が、シンの目の前に現れる。

タラストに先導され、「際大きなテーブルの直前で来たシンは、そこでオーガの素材を異空間バッグから取り出す。同時にタラストの歓喜の音が、部屋中に響き渡った。

ブルーオーガの素材が一体分、それにレッドオーガの内臓が一通り。これらがテーブルに並べられる度に、彼の口からはため息が漏れる。

「これは凄じ！ 魔力を纏ったブルーオーガの皮膚に、レッドオーガのものと合わせて二分分の内臓。しかも鮮度がまったく落ちていないとは。この容器を満たしている銀色の液体、これに秘密がありそうですが……」

「東大陸を旅していたときに教わった保存液です。よろしければ製法もお教えしますよ」

中央、そして東大陸は、はっきりした四季があり、特に東大陸は湿気も多い。この保存液は、東

大陸の一部で用いられている薬品で、長距離輸送と環境変化による素材の劣化、腐敗を防ぐために開発されたものだ。

シンのように、頻繁に各地を飛び回りでもない限り、熱帯、亜熱帯の南大陸では特段必要にならないものの、在庫を大量にストックする大店にはありがたい液体とも言える。

オーガの素材を全て買い取り、保存液の製法まで教わったタラストは終始ご満悦だ。

「いやあ、これでもてなすこちら側の方が得が多いではないですか。はて、これは困った……」

まったく困っていない顔でウンウンと唸りながら、何やらブツブツと独り言を呟いていたタラストだったが、ウンと一つ頷くと、含みを持たせた笑顔でシンを手招く。

タラストの先導に従い地下の保管庫に下りたシンたちは、そこからさらに下へ、幾重も魔法で施錠された扉を抜け、ここが最後であろう、巨大な扉の前までやってきた。

「タ、タラストさん。商店の地下、というかアナンキアにこんなものがあるなんて聞いたことがありませんよ？」

「族長は知っておいでですよ、カイト様。貴方はいずれその座を継ぐお方、お見せしても問題はな

いでしよう」

「——!!」

タラストはサラリと言つてのけるが、その言葉が意味するところは、ここが、里の秘事に関わるということである。カイトは思わず振り返り、シンとタラストの顔を交互に見やった。

「大丈夫。シン様はこの扉の奥に進む資格のあるお方だと、わたくしは確信しております。さあ、

入りますよ——」

ギイ——

「おお……」

扉の隙間から流れ出る冷気に頬を撫でられ、そして、扉の先から感じる魔力の波動に、シンは思わず声を上げた。

扉の向こうに足を踏み入れた三人は、部屋全体を覆う濃密な魔力と、地上にいるときよりも濃い緑の香りに包み込まれる。

「まいったな。ここは宝物庫かよ……」

あまりの出来事に、シンは思わず言葉遣いが素に戻る。

「え？ シンさん、ここにあるのは素材ばかりですけど？」

「カイト様。シン様はこれらが何であるのか、それを踏まえた上でそう評したのですよ。ええ、その通りですよ、シン様。ここにあるのは全て聖樹、そして——世界樹の素材でございます」

「っしやあ!!」

シンは本日二度目のガッツポーズをした。

タラスト商会の地下にある秘密の保管庫。そこに秘蔵されているお宝素材を前に、シンは生唾を呑み込み目を輝かせ、それらを一点一点慎重に調べる。

そこには大小様々な枝、若葉に朽ち葉、木肌に根。果ては、一口食べれば寿命が延びると言われ

る伝説の『生命の木の実』まで置いてあった。

しかし、シンが最も注目したのはそのどれでもない。この宝物庫の隅に置かれた、密封された大きなガラス瓶に入った液体。彼の視線はそれに釘付けになる。

そんな彼の様子に、タラストは満足げな表情を浮かべ、ウンウンと頷いた。

「さすがシン様、私の目に狂いはありませんでしたね」

「タラストさん。シンさんがずっと見ている瓶ですけど、中身は何なのですか？」

『世界樹の樹液』——カイト様は聞いたことは？』

「父から聞いたことがあります。大変貴重な品だと」

「その通り。アレを用いることで、ある秘薬を作ることが可能になります。しかし同時に、その秘薬を作ることにしか、アレは使い道がないのですよ！」

顔を紅潮させつつ、やや興奮気味にタラストは語る。その秘薬が何なのか、言いたくてたまらないうという表情で。

続きが気になるカイトは黙って待つのだが、タラストはそれから口をつぐんで、一向に喋ろうとしない。カイトが焦れるのを楽しんでるようにも見える。

「タラストさん、もったいぶらずに教えてください！ 一体あれは、何の材料なんですか？」

痺れを切らしたカイトが、拗ねたように大声で問います。するとタラストは、待つてましたとばかりに答えを口にした。

「霊薬ですよ」

「？」

「靈藥。それは、およそありとあらゆる怪我、病気を治し、果ては過去に失われた肉体すら、在りし日の状態に戻すことを可能とする万能の秘薬。しかし現在、錬金術ギルドには、この伝説の秘薬を作る錬金術師は登録されていない。」

ガシツ!!

「ひゃっ!!」

興奮を抑えきれないタラストは、カイトの両肩を前後に揺すりながら、熱に浮かされた表情で訴える。

「いいですか、カイト様……あの樹液は、靈薬を作る以外の使い道はないんです。しかし！世界中の錬金術師が登録しているはずの錬金術ギルド。そこには、靈薬を作ることのできる錬金術師など、登録されてはいないのでですよ!! これがどういうことか分かりますか!？」

そこまで聞けばカイトも理解した。たとえそれがどんなに貴重な品であれ、使えないものに興味を示す者はいない。もしここで、シンが世界樹の樹液を手に入れたとしても、作り手の存在しない薬の材料など、ギルドがわざわざ高値で買い取ってくれるはずもない。いつか現れるであろう伝説の錬金術師のためとはいえ、劣化して使い物にならなくなる確率の方が高いわけで、安く買い叩かれるのが関の山である。

にもかかわらずシンは、興奮する二人には目もくれず、ガラス瓶を凝視したままだ。そして時折、「他の素材が確か……」とか「この量だと……」などと呟いている。

そして――

考えがまとまったのか、パンと手を合わせたシンは顔を上げた。

「タラストさん、この大瓶一本、大金貨五〇〇枚で足りますか?」

「ごっ! シンさんっ!?!」

横に控えるカイトが、額の大きさに思わず驚きの声を上げる。しかし、驚く少年とは対照的に、言った方も言われた方も、大金貨五〇〇枚（五億円）という金額にまったく動揺しない。この価値を知っているからだ。

タラストは告げる。

「『世界樹の樹液』、確かに金額としては充分ですが、シン様、これは他とは一線を画す貴重な品。金を出せば手に入るものではないと、あなた様ならご理解いただけるかと」

タラストの大仰な言い回しに、シンもまた大きく肩をすくめると、芝居がかった仕草で腰の異空間バッグから薬瓶を数本、大事そうに取り出して、テーブルに並べる。

薬瓶に入った黄金色の液体。強い魔力を感じさせるそれは、大瓶に入れられた『世界樹の樹液』によく似ていた。

「おおお――」

「とりあえず六本。物々交換なら受けてもらえますか?」

「もちろんです、どうぞお持ち帰りください。もしよろしければ、先程の大金貨五〇〇枚で、もう一瓶買ってくださいませんか？」

「いえ、他の材料を考えると、一瓶で充分です。他の素材の代金に使わせてもらいますよ」

大口の顧客の前に、商人は深々とお辞儀をする。そして霊薬の瓶を手にとると、まるで射貫かんばかりに凝視し、やがて怪訝な表情を浮かべる。

「ん？」

「シン様、コレはいけません。シン様の名前が製作者として記されているではありませんか。コレはマズイ、大変マズイです」

タラストの言うとおり、大変にまずい。もしもこれが流通した場合、シンの名は確実に世界中に知れ渡るだろう。気分は指名手配犯だ。

貴重なお宝の前に、大事なことを忘れていたシンは、しまったという顔をして頭をかく。

そんなシンの表情を見たタラストは、口の端をわずかに上げると、囁くように言葉を紡いだ。

「ですがご安心ください。私は、この製作者の登録を空白にする裏技を知っております」

ですので、他では流せない秘薬や道具などありましたら、どうぞよしなに——恭しく下げたタラストの頭には、そんな見えない張り紙がしてあった。

相手の意図を正しく理解したシンは、こちらも口の端をニヤリと上げる。

「ほう、それはありがたい。これほど気配りの行き届いたお店とでしたら、私も末永くお付き合いしたいですねえ」

「これは嬉しいことを仰る……フッフッフ」

「フッフッフ……」

第三者から見れば、片や伝説級の秘薬の製作者、片やそれを安全に市場に流せる有能な商人——のはずなのに、なぜか二人とも、悪巧み感を前面に押し出して不敵に笑う。

単にノリが近いだけなのだろうが、そのノリについていけない純朴な少年は「あ、この人たちがメな大人だ」と思いながら、逃げることも許されず、ただただ不幸だった——

「……なんだか、とても疲れました」

「そうですか？ 私は元氣になりましたよ」

最敬礼でお見送りをするタラストを背中に感じながら、重い口調でカイトが呟く。

そんな少年とは対照的に、緩む頬を抑えきれず、終始ニヤけ顔で足取りも軽いシンは、貴重な素材を大量に買い込んでご満悦だった。

次はどこへ、などと思っていたが、シンの買い物は予想以上に時間がかかっていたらしく、いつの間にかお日様が真上に昇っている。近くの食堂に入って昼食を済ませると、食後のお茶が出てくる頃には、カイトにもようやく落ち着きに戻っていた。

「二人とも無茶苦茶ですよ、いくら伝説の……」

「ははは、カイト君は次期族長ですからね。大きくなればああいう機会も増えますよ。それと、こんなところでそういう話を、軽々しく口にしてはいけませんよ」

人差し指を口元にあてるシンの仕草に、カイトはハツとした顔をすると、すぐに背筋を伸ばして居住まいを正す。ここは人の出入りが激しい食堂の中、誰が聞き耳を立てているか分からない。こんな場所で話す内容ではなかったと、彼は口を引き結ぶ。

そんなカイトの様子を見て、シンはしまったと眉を顰める。

いずれは族長の地位を引き継ぐ身ではあるが、少年は今はまだ大人の庇護下にあるべき年齢だ。秘密だの責任だの、厄介事を背負わせるにはまだ早かろう。些か大人げなかったかなと、店内での行動を少しばかり反省した。

シンは話題を変える。

「そうだ、カイト君。話は変わりますが、フィーリアさんは近いうちに結婚するのですか？」

「はい！ 姉さんなら三カ月後、ルーケンヌの次期族長であるラステイ兄さんのもとへの輿入れが決まっています」

「兄さん？」

「ああ、いえ、お互い親が族長ということもあり、昔から家族ぐるみの付き合いなんです。とても立派な方ですよ」

カイト少年はそう言うと言出し出した。

ルーケンヌ——森の北に位置するアナンキアとは、世界樹をはさんで反対側の南に存在する聖樹。同時に、そこに集う森エルフの氏族名であり、集落の名でもある。

戦闘に秀でたアナンキアとは違い、木工製品や武具など、製造業に優れた氏族だ。

ここで各氏族のことを簡単に説明すると——

近接戦闘に秀でたサンノイド。

魔法技術に秀でたパラマシル。

武芸全般に秀でたアナンキア。

生産技術に秀でたルーケンヌ。

そして、目立った特徴はないものの、一本だけ世界樹と離れた場所にあるため、結果としてグラウベリア大森林の三分の一を縄張りとし、ハルト王国との交流が盛んなミラヨルド。

現在、サンノイドとパラマシルは、氏族間で睨み合っており、何かの拍子に、本格的な衝突が起きるかもしれない。また、その争いが、他の三氏族に飛び火しない保証はない。

例えば、相手の里を攻めるため、他の氏族の協力を要請することも考えられるだろう。

もし、その要請を断った場合、果たして彼らは納得し、大人しく引き下がるだろうか？ 既に相手方に取りこまれているのではないか？ などと疑ったりはしないだろうか……

彼らの矛先が別の里に向いたとして、アナンキアはともかく、ルーケンヌは非常に深刻な被害に見舞われることだろう。

そんな悲劇を事前に防ぐべく、アナンキアとルーケンヌの族長はヒト種の国王や領主に倣い、互

いの子供らを結婚させ、対外的には同盟を結んだと思わせることを考えたのである。

幸い、両家族は昔から交流があり、子供たちの仲も良かったため、さしたる問題はなかった。

両者の話し合いはトントン拍子に進み、結婚の時期は、フォレストバイパー大繁殖期の終了に合わせる行なうことに決まる。

ただ、シンはあるとき見たファイリアの表情が気になった。とはいえ、それを口に出せば騒動の引き金になるのは目に見えていたので、口をつぐむしかなかった。

「ラストイ兄さんはルーケンヌ一の戦士で、姉さんも敵わないですよ！」

「ほう、それは凄いですね」

(それは強い、のか?)

正直、戦いが不得手のルーケンヌで一番と言われてもピンと来ない。それに、オークに押し倒されるファイリアしか見ていない身としては、彼女を引き合いに出されても、今一つ判断のつかないシンだった。

食事を終え、里の中を一通り回ることがなくなる。どうしようかとシンが悩んでいると、意を決したようにカイトが話しかけてきた。

「あの、シンさん。姉さんから聞いたんですけど、なんでもオークの肉を使って、とても美味しい料理を作ったとか」

「正確には、使ったのは肉ではなく骨ですね」

「オークの骨ですか？ 実は、姉さんがアレは絶品だったと、それはもう嬉しそうに話すものですが、僕も父も気になってしまいました、ですから……」

氏族の特徴か、それとも血筋か。ともあれ胃袋さえ満たしておけば、アナンキア氏族はシンに対して不義を起こす心配はなさそうである。加えて先程の件もあり、目の前の少年の願いを叶えることに吝かではないシンだった。

「いいですよ、材料さえあればご馳走いたしましたしょう。ただ、仕込みに数時間かかるので、すぐにはいきませんが」

「でしたら今すぐ！ オークなら、里の戦士が朝の間に何体か狩っておりますので!!」

「うわあ……」

どうやら、ふるまうのは一家族、ではなさそうである。



——現在、俺の前には合計七つの大きな寸胴が並び、そのどれもがグツグツと煮えたぎり、ゴポゴポとねばっこい泡を立てている。

肉を削ぎ落としたオークの大腿骨——いわゆるげんこつ——を真ん中からへし折り、鍋で二〇分ほど茹でたら一旦その煮汁を捨てる。その後、再度寸胴に水と、臭い消しのため、ネギやシヨウガに似た野菜をぶっこんだ。

本来は八時間くらい煮込みたいところだが、今回は時間短縮するべくげんこつを細かく砕き、ついでに圧力鍋よろしく、嚴重に密封して一気に煮込む。

二時間ほどで封を開けると、大量の蒸気とともに猛烈なスープの匂いが周囲に充満する——ここで戦士団の料理当番のエルフたちが一度逃げた。まったく、戦士が敵前逃亡とは何事か！

無茶な方法だったが運良く失敗はしなかったようで、その後は水のつぎ足しとアク取りを丁寧に行う。やがて、乳白色のドロツとしたスープができた。

ラーメン自体は、醤油や味噌ベースのものが既に広く流通している。おかげで、麵の種類もいくつかあった。彼らはとんこつラーメンをご所望だったので、細麵を人数分用意させる。

最初は涙目だった料理当番も、匂いに慣れてきたのか、いつの間にかとんこつスープに興味津々だ。

乾物を戻した出汁と塩ダレにスープを合わせ、味見をさせる。フィーリアのときと同じく、耳をピンと立ててしばらく固まっていた。氏族共通の反応なのだろうか？

どこから聞きつけたのか、宿舍の食堂には非番の者まで集まっており、すでに満席になっている。さらに、座れなかった連中が列をつくり、それが建物の外にまで延びていた。まあ、期待されているということなのだろう。嬉しさ半分、面倒臭さ半分だな。

独特の匂いに、はじめはおっかなびつくりの彼らだったが、一人の勇者が歓喜の声を上げると、その後は麵をすすする音が食堂内を支配した。

とはいえ、苦手な者もやはり中にはいるようで、おおむね五人に一人くらいが微妙な表情を浮かべている。そんな彼らのラーメンは、近くにいた連中によって争奪戦が起きていた。仲が良くて結構だな、オマエラ。

寸胸の前で腕組みをしていた俺の前に、テンションの高いカイト君がやってきた。

「シンさん、ご馳走様でした！ 姉さんが言ってたとおり、本当に美味しかったです!!」

うん、バラガの街でも思ったが、きちんと感謝を伝えることができる子には、きつと輝く未来が待っているぞ。……そして一人で三杯も食ってる族長よ、口いっぱい頬張ったままモゴモゴ喋っても通じねえからな？

スープのレシピは、料理当番に口頭とメモ書きで教えておいた。今後、アナンキアにもとんこつラーメンブームの流れが押し寄せるだろう。ちなみに俺はとんこつしようゆ派だ。

労働の汗、そして、とんこつラーメンを美味しくそうに食す森エルフたちの顔を見て、俺はなんとも言えない達成感に包まれる。

彼らの笑顔を背に宿舍を出ると、すでに夜だった。体に当たる冷たい風は、汗をかいた顔に心地よい。

そして、思い出したかのように疲労を感じながら、俺は咳かすにはいられなかった。

「おかしい、俺は本来おもてなしを受ける側のはずだ……」

翌日、目を覚ましたシンが食堂へ足を運ぶと、本日の料理当番がとんこつスープの仕込みに汗を流している。おそらく、外回りや任務で食べられなかったメンバーの分だろう。どうやら一日ととんこつラーメンは市民権を獲得したようだ。

森の中で生活する彼らが、この強烈な匂いを体に纏わせても平気なのか。魔物や獣たちに気付かれるのでは？ とは、シンの疑問だったが、体臭や口臭を完全シャットアウトする薬草やら木の実やらがあるそうだ。森エルフの消臭対策に抜かりはない。

そんなことに感心しながらシンが朝食を食べ終えると、外がなにやら騒がしい。

「なにかあったのですか？」

「おお、シン殿。昨日は素晴らしいラーメンをふるまっていたくださりありがとうございます！ 実は今朝、外に出ていた者たちがフォレストバイパーを狩って戻ってきたのですよ。これで大繁殖期に向けての準備ができます。おお、そういえばコチラも、シン殿の功績が多分に含まれておりますな！ いやまったく、シン殿には足を向けて寝られませんな」

饒舌に話す戦士に愛想笑いを返したシンは、その場にいたフィリアにも声をかける。

「ん？ おお、シン。昨日は——」

「フィリアさん、おはようございます、なんでもフォレストバイパーを狩られたとか」

「うむ、必要なものはこれで揃った。そうだ、ついでだからシンも一緒に来い！」

「は？ いや、えっ——？」

シンが考えていた今日の予定は、全てキャンセルになった。

換気の悪い地下室を、甘ったるい香りが支配する。

ここはとある薬師の家。そこでシンは、なぜか族長父娘と一緒に、薬師の作業を見学していた。

作業台に並べられた主な材料は、聖樹アナンキアの樹液に、里の果樹園で栽培されているヤシの実のような木の実。『リキュドの実』というらしく、熟したら、ココナッツのように中の実から油を採ったり、実を包む繊維状の皮をほぐして日用品などに使うそうだ。豊のようなアレは、コイツが原料なのだから。

そんなリキュドの実だが、未成熟の実をもらって後、一カ月ほど放置しておく、発酵して中身がアルコールに変わり、天然の果実酒『リキュド』ができ上がる。作業台の上では、殻を割られたリキュドの実が、酒の香りを周囲に撒き散らしていた。

その他にも、粉末状の魔石や錬金術に用いられそうな薬剤の数々、最後に、フォレストバイパーの毒袋が一〇体分。

「……………？」

首を傾げるシンをよそに、アナンキアの薬師——正確には錬金術師——は、酒に変化したリキュドの汁を甕に注ぎ、薬剤を投入する。

「フィリアさん、毒袋の数が多い気がするのですが？」

「ああ、あれはルーケンヌに渡す分だ」

グラウーベリア大森林に住む五氏族の中で、ルーケンヌは最も戦闘が苦手な氏族だ。もちろん上

位の戦士であれば、フォレストバイパーを狩ることくらいいけない。

ただ、この時期のヤツらは活動範囲が広く、また凶暴化もしている。短期間で定数を揃えるのは難しいため、毎回アナンキアが提供しているとのこと。

その見返りとして、アナンキアはルーケンヌの美しい工芸品や優秀な武具の取り引きに便宜を図ってもらう。つまりは持ちつ持たれつの関係だ。

そうこうしている内に甕を火にかけ、弱火でゆつくりと中の液体をかき混ぜながら、フォレストバイパーの毒袋から搾り出した中身を投入した。

すると、甕の中の液体が一気に黄色く染まり、香りの蒸散が一旦止まる。その状態から魔石粉を少量ずつ振り入れると、黄色い半透明の液体は内側からキラキラと光を放つ。

火から離して熱を冷まし、仕上げに聖樹の樹液を小瓶で二本ほど入れてしばらく放置。すると最後は液体が琥珀色に変化、蜂蜜にも似た濃厚で甘い香りと、脳天にガツンと来る酒の匂いを漂わせる液体が完成した。

これを二つの小さな甕に分け、嚴重に封をする。

「森のいくらか広い空間にコレを撒けば、匂いに釣られた雄のフォレストバイパーが大量の餌を持つて集まり、そこへ餌目当ての雌が群がるというわけだ」

「へえ、フォレストバイパーも、んべえとは知りませんでしたよ」

「ハハハ、そうかのんべえか！ 確かに確かに」

シンの言葉に、楽しそうに笑うフィーリアと族長のナハトだった。

「それではシン殿、これがルーケンヌへの紹介状にございます。これを入り口の番兵に見せれば、向こうでも行動の自由は保証されましょう」

「……ありがとうございます」

シンにとってはありがたい話だが、書状一つで余所者がそこまでの待遇を確約される。果たして一体どんなことが書かれているのか？ 彼の頭に不安がよぎった。

そして不安要素がもう一つ。

「フィーリアよ、シン殿の護衛はまかせたぞ」

「お任せください父上。いえ、族長！」

「うむ、それから婿殿に会ったら、義父がよろしくと言っておつたと伝えてくれ」

「……はい、承知いたしました」

またあの表情を浮かべるフィーリアに、シンの不安は募るばかりだった……



アナンキアの街から離れること三〇分。他とは違う雰囲気をかもし大木の前で、シンとフィーリアが立ち止まる。

「なんだか回廊となっている木と他の木の区別がつくようになってきましたよ」

「シンは良い目をしてるな。まあ、資格がなければ回廊を開くことはできないからな。誰に知られたところで問題は無い」

そう笑うフィーリアだったが、シンは同意できない。

（待ち伏せにここまで都合の良い場所もないだろう。それに、もし切り倒した場合、出入り口としての機能は失われるのか？）

精霊回廊のことは、ヒト種の間では広まっていない。とはいえ、まったくの秘匿情報でもないだろう。ミラヨルド経由で、ハルト王国に情報が流れている可能性は低くない。

今は良くても、将来のことまで考えると、何かしらの対策は考えておくべきだ。シンはそう考えるが、しょせん部外者であり、口を挟むことではない。それに、フィーリアが知らないだけで、族長のナハトがちゃんと対策を講じているかもしれないなかった。

回廊を何度か越えると、第一印象で砦を連想させるアナンキアとはまた違った、温かみを感じさせる門構えがシンたちを迎える。

「——ん、何者か？ つと、これはフィーリア様、ようこそおいでくださいました」

「ああ、役目ご苦労。今日は例のものができたので届けに来た。それと、我らアナンキアの客人を紹介にな」

「はあ……客人、ですか？」

フィーリアの後ろに立っているヒト種の男を、門番は不思議そうに眺める。ヒト種の男——シンは、戸惑う門番に向かって笑顔で挨拶をした。

「はじめまして、私は旅の薬師でシンと申します。この度は不思議な縁により、アナンキア氏族との繋がりができました。そして今日、族長であるナハト様の計らいにより、こちらへ足を運ぶ機会をいただいた次第です」

そう言つて、ナハトから渡された紹介状を渡す。

書状を受け取った門番は、裏の封を確認すると即座に態度を改めた。

「シン殿でしたな。ようこそルーケンヌへ。われら聖樹の民は貴方を歓迎いたします」

深々と頭を下げる森エルフの男から書状を返してもらったシンは、今度は彼の方が、鳩が豆鉄砲を食ったような表情を浮かべ、首を傾げる。

シンの疑問は、フィーリアによって解決した。

「その書状に施されている封蝋の紋はな、それを持つ者が、自分たちの氏族にとって重要な人物だということを表す印なのだ」

「なるほど」

やがて二人は街の中央、巨大な樹の近くに建てられた建物の前までやってくる。

「ここがルーケンヌの族長の住まいだ」

ルーケンヌ——アナンキア同様、聖樹ルーケンヌを中心に柵で囲まれた円形の街。

住人二万人のうち、職人として働く人数は五〇〇〇人。その腕前は、生活用品から武具に至るまで、他の四氏族より頭一つ抜けた技術を有する。

代わりに、アナンキアのように一〇〇〇人ほどが選任戦士として訓練、活動してはいるが、総合的な戦闘能力は他氏族に劣る。

建物の中に通されたシンとフィーリアは、森エルフの男女二人と向かい合って座っていた。職人揃いの氏族とはいえ、さすがは一族を束ねる長と言うべきか。男性の方は、ナハトにも劣らぬ空気を放っている。アナンキアの戦士に交じっても、かなり上位に位置するだろう。

それとは対照的に、女性の方は線が細く、およそ荒事に向くタイプには見えない。しかし、ただ座っているだけで優雅さを感じさせる物腰と所作は、なるほどフィーリアとは年季が違う。これこそ成熟した森エルフの女性というものなのだろう。また、彼女の着ているものが、南大陸でお目にかかることはまずないであろう、いわゆる着物であることも、前世が日本人のシンが、女性らしさを感じる要因かもしれない。

そんなことをシンが考えていると、男性が力強い、よく通る声で話しはじめる。

「よく来たな、フィーリア、それにお客人のシン殿。まずは自己紹介を、私はラストイ、ルーケンヌの戦士団を束ねる団長で、次の族長を務める予定だ。そしてこちらがナティス、現ルーケンヌの族長で、私の母でもある」

「え？」

「ん？」

「あ、いえ。てつきり貴方が族長で、そちらは奥方だと思っておりましたもので」

「……私はそんなに老けて見えるか？」

怒ってはいないが、悲しげな顔を浮かべるラストイに、フォローしようとシンが腰を浮かしたところ――

「ラストイ、そこは『母はそんなに若々しく見えるか？』と喜ぶべきところでしょう？」

「っ!! いいえ母上! はい、失言でした……」

ラストイ、そしてシンの周囲の気温が三度ほど下がった気がした――

シンの危機管理能力は、この場を早く収めよと激しく訴える。

「申し訳ありません! 外見から森エルフの年齢を推測するのは、ヒト種である私には困難でありまして。むしろ言うまでもないことではありますが、ナティス様はとても若くお美しい、そしてた、おやかな女性だと、私は理解しております!!」

「ホホホ、シン殿と申しましたか? お世辞とは分かっていますが、面と向かって褒めていただくのは嬉しいものですね――ラストイ、貴方も少しは見習いなさい」

「ハッ!!」

「それでフィーリア、今日はこちらのシン殿を伴って、一体どのような用向きですか?」

軽いお説教が終わると、ナティスはフィーリアに向き直り、来訪の理由を問うてきた。

「はい、本日は『蛇寄せの蜜酒』ができて上がりましたので、それをお届けにあがりました。それと、こちらに座っておりますシン殿を、お二方に引き合わせるためです」

フィーリアの言葉を受け、シンはナハトから預かった書状を取り出す。

ナティスはそれを受け取ると、手紙に目を通す。そして一度深く頷いた後、シンに向き直って頭を下げる。

「シン殿、この度はフィーリアの危機を救っていただき、感謝にたえません」

「いえいえ！ 謝意ならナハト様より、過分なまでの厚情を賜っております。この上ルーケンヌの族長にまで頭を下げられては、どうして良いか困ってしまいます！」

「そうですか？ ……いえ、恩人をあまり困らせるものではありませんね。ともかくシン殿、貴方はアナンキアのみならず、ルーケンヌにとっても大切な友人です。今後、何か困ったことがあれば、我らを頼ってください構いません。ルーケンヌが族長、ナティスの名において宣言します」

「はあ……ありがたく存じます」

「なんだか大事になってしまい、シンは戸惑う。」

元々、ルーケンヌが職人だらけの街だというから、ついてきたというのに、あまりVIP扱いをされては気軽に、そして気楽に動き回れなくなりそうに困る。

シンとしては、珍客程度に思ってもらったほうが良かった、というのが本音だった。

「それにしても、シン殿。顔つきから察するに、二〇も数えておらぬ年だろう。それなのに、フィーリアでも手こずる相手を倒すとは、なかなかの腕前なのだな」

「いえ、私は薬師ですので、腕っ節の方は……」

シンは、フィーリアと出会ったときのことを二人に語った。自分は戦ってすらおらず、背後から薬を撒いてだまし討ちをしたのだと。ちなみに、フィーリアの名誉のため、なぜそのような状況に

至ったかについては話さなかった。

「むう……」

「フフフ、シン殿は面白い方ですね」

ラストイはやはり武人肌なようで、フィーリアと似たような反応を示し、対照的にナティスは楽しそうに笑っている。

他にも滞在中の出来事をシンが話していると――

「シン殿、少しよろしいかしら？」

ナティスはシンを伴い、部屋を後にした。ラストイとフィーリアには、その場に残るように言い含めて。

無言のままシンの前を歩くナティスだったが、後ろで何か言いたげなシンに気付くと、艶やかな笑顔でシンに微笑みかけた。

「あの二人も会うのは久しぶりですから、きっと積もる話もあるでしょう。それとも、こんなオバサンと一緒に嫌かしら？」

「あいにく、この森に入ってから今まで、そのようなエルフに会ったことはありませんよ？ よもや、目の前に咲く一輪の花に向かって、そういった暴言を吐く不届き者がいるとは思えません」

「アナンキアのカイト君にはよく、『ナティスおばさん』と呼ばれているのですけどねえ」

「少年……」

とんだ怖いもの知らずの存在に、シンは眉間にシワを寄せ、強めに揉み上げる。面白そうにそれ

を眺めるナティスはやがて、屋敷の隣に付設してある建物にシンをつれてきた。

ルーケンヌの建物は、アナンキアのもの比べて明確な違いが見られる。

どちらも木造建築だが、宿舎など一部の例外を除いて、ほとんどの建物が平屋造りのアナンキアに対し、ルーケンヌには二階建てや三階建ての屋敷がそこかしこに存在していた。

この両氏族の建築様式の違いは、ルーケンヌという街の特徴に起因する。

ルーケンヌは職人の街という事もあり、家族に一人は職人がいる。そのため、いつでも作業ができるようにと、職人たちが集まる工房とは別に、個人宅にも作業場が併設されているのだ。

そのため、街の規模や人口が同じにもかかわらず、居住用に使える土地は明らかに少ない。結果、居住スペースを『上』に求めるのは必然と言えた。

「ナティス様、この作業場は貴女の？」

ラスティのものは微塵みじんも思わないシンだった。

「そうですね、私もたまに使うこともありますけど、今はもっぱら私の子が使っております——そんなに驚いた顔をしなくてくださいな。ラスティではありません、あれの下にもう一人おりますの」

「あ……ですよねー」

「フフフ、案外シン殿は、ラスティよりこっちの子の方が話が合うかもしれませんね。セルフイ、入りますよ」

ギイ——

建物の中に入ると、加工したての若々しい木材や、宙を舞う「おが粉」の香りが鼻に届く。

そしてその中で、ブカブカの、まるでツナギのような作業着に身を包んだ小柄な森エルフが、腕組みをしてウンウンと唸うなっていた。

後ろ姿で顔は見えないが、ナティスやラスティと同じ輝くような金髪には、おが屑くずがまとわりつき、実に残念なことになっている。

だがシンはむしろ、その後ろ姿に大いに共感と好印象を抱く。ただひたすらに自分の世界に集中している。職人とはかくあるべし！ とはシンの偏かたよったこだわりだ。とはいえ、誰かが部屋に入ったことにすら気付かないのは、さすがに問題かもしれないが。

「セルフイ!!」

「ひああああ!! ……あ、お母様。何か御用ですか？」

イキナリ大声で名を呼ばれ、可愛らしい悲鳴を上げた若い森エルフは、耳を押さえながら振り返るが、相手が母親だと分かると、何事もなかったかのように用向きを聞いてくる。どうやら日常風景のようだ。

「まったくアナタは……いい加減、集中すると周りが見えなくなるクセを直しなさいと言ってるでしょう？ 今日はお客様もいらつしやるのですよ。ほら、ご挨拶あいさつなさい」

セルフイと呼ばれたその森エルフは、そこでようやく母親以外の来訪者の存在に気がつく。

ダボダボのツナギに身を包み、シンの顔をまじまじと見つめる姿はあざとくも可愛らしい。しかし、ツナギの上からでも分かる胸の膨らまなさは、彼に現実を突きつける。